

# 東方神転録

ミナ・スカーレット

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

突然死んでしまった少年。なんと、死因は神々のミス!! お詫びとして、転生の権利を手に入れ向かった世界は東方Projectの世界。少年は、どんな道を行くのだろうか。

初投稿作品なので変なところもあると思いますが、よろしく願います。あと、不定期投稿になります。

# 目次

死、そして……。―― 1

## 古代編

目覚め。そして出会い。―― 4

ここ、ほんとに古代の街なのか？

8

神との遭遇―― 12

転生妖怪の行く末は？―― 16

閑話：月読命の受難―― 20



# 死、そして……。

ああ死んだな。

俺がまず思い浮かべたことはそれだった。

なぜなら、トラックが思いっきり突っ込んできてるからな。

まあ、誰かを守って死ねるなら良かったのかな？

俺に突き飛ばされた少女が泣いている。泣くなよ。

泣いたところで、何も変わらないのだから。

それに、俺のことより自分のことを考えて行動しな助けを呼んだところでもう生きることはできないからな。

「ああ、どうせ死ぬならもつと自由に生きていたかったな。」

それが、俺の最後の言葉だった。

そうなるはずだった。

此処はどこだ？ 周りを見る限りすべて白い空間だ。

あり得ない。

まあ、死んだ後意識がある時点で異常なんだがな。

まあ、此処は地球で無いことは確かだ。

「おい。」

誰かいないかね。

「お〜い。」

はあ、誰もいなさそうだな。

「いや、私がいるではないか。」

で、さつきから聞こえるこの声は誰のだ？

「おお、やつと気づいたか。」

まず、あんたは誰だ？姿は見えないが声だけが聞こえるんだが。

「当然だよ。魂だけの存在に神は見えないのだから。」

自分で、神なんて言うのかよ。

「だって、実際に私は神なんだから。」

いや俺は喋ってないが、なんで会話が成立しているんだ？

「私は、神だから心を読むことぐらいかんたんなのだよ。」

はあ。やっぱり俺は、死んだのか。それはそうとして神がいったい俺に何のようだ

？

「いや、すまないな。君が死んだのは神々のミスでね。

原因は、神々同士でプリンをめぐるって軽い争いをしていただけだけどその時の、流れ玉の一発が君の命のロウソクを消し飛ばしてしまったんだよ。

まあ、そのお詫びと言ってはかなり軽すぎる物になつてしまふが、君に転生の権利をあげよう。そして、君の好きな世界に転生させてあげよう。

もちろんチートは、有りで能力をあげるとしよう。

まあ、色々な制約や身体の状態や君の容量的な問題などがあるからあげられる能力は、3つくらいが限度なんだけど。」

なら、俺が望むのは東方 Project の世界だ。能力は、○○させる程度の能力と、○○○○の力を扱う程度の能力だ。これで頼む。

「君は能力一つ選ばなかった分があるから、種族も決めていいよ。」

決めていいなら種族は、妖怪の○○で頼む。

「了解。じゃあ、新しい世界でも元気で暮らしてね。あ！あと、いい忘れてたけど多分、君とはすぐに会うことになるかもね。」

え?!しかし、その言葉に対する疑問を思い浮かべる前に周りが光りだした。

そして、俺はまた意識を失った。

## 古代編

### 目覚め。そして出会い。

ん？なんか、眩しい。とりあえず起きてみるか。

なんか森の中にいるし。あー、まだ眠いわ。

「ふあゝ。」

ん？ちよつと待て。今の声は、誰のだ？まさか!!

「あ、あー。」

やっぱり自分の声かよ。

声高くて？それに、なんか今の体変な感じがするし。

数分後……

とりあえずこの身体の確認は終わった。

そして、一つ許せないところがあった。

「なんで、女になっっているんだ!!」

ふざけるなよ、あの神。

まあ確かに、性別は男にしてくれとは言っていないが性別を変える必要が、何処



にあるんだよ。

まあ、種族は願った通りになっているみたいだが。

まあ、なんとかなるかねえ？

とりあえず次は能力の確認といきたいのだけど、どうやったら使えるんだ？  
念じたら使えるなんてことはないよな？

まあ、ものは試しだ。やってみるか。

「よし。じゃあ、まずは使ってみたかったこれからいくか。」  
時を止めることをイメージして……

「Time Stop。」

よし、時は止められたな。じゃあ解除しよう。

「Restart。」

解除もできたな。あとは、妖力の扱い方も練習するか。他には……瞑想するかな？

5年後……

うーん何するかな？散歩でもしてみるか。じゃあ、さっそく行くか

「きやー。」

……な？女の子の声が出たんだが、こんな深い森の中に女の子が普通ひとりでくるか

?

まあ、来てるとなると訳ありかねえ。まあ助けに行くかね。

どちらにしろ、この姿のままだとまずいから姿を変えんとするかねえ。

よし、『変化』じゃあさっそくいくかね。確かこつちから聞こえたな。もう一度使うか。

「Time Stop」

おつと確かに女の子が妖怪に襲われているな。助けるか。

じゃあこの木の枝をナイフにして、投げる!!

「Restart」

よし、撃退成功だな。

「あの一。」

ん? ああ、忘れてたわ。

「助けていただきありがとうございます。でも、なぜ…: 妖怪であるあなたは私を助けたのですか?」

な!! バレただと!! なぜばれたんだ?

「気まぐれだ。それよりも何故わたしが妖怪だとわかった?」

「あなたが、妖力をみにまよっててるからですよ。」

ああ、そうか。人間は、妖力じゃなく霊力を使うんだったな。すっかり忘れてたぜ。うーん、することがなくなっちゃった。どうするかねえ？

「そうだ。貴女の村までついていっていいかな？」

「迷惑かけないなら私の家に来てもいいわよ。ただし、条件があるわ。1に私の手伝いをする事。2に妖力を隠す事。これを守るならついてきてもいいわよ。」

「なら、ついていくよ。」

「そう。ならついてきて。」

こうして俺は助けた女の子についてくことにした。

あ、そういえば名前聞いてなかったわ。

「ここ、ほんとに古代の街なのか？」

「さつき会った女の子について行っているが、どこかで見たような服をきているんだよな。」

「名前聞いてなかったから、今聞くか。」

「名前聞いてなかったけど、貴女の名前は何？」

「私の名前は、八意永琳よ。」

「ああ!! 思い出した。この独特な服は、永琳のだった。ん? でも永琳小さくね? もしかして俺は過去に来ていているってことか? まあ、それなら納得はできるが。」

「私の名前の名前を聞いたのだから、貴女の名前も教えてくれるかしら。」

「ん? 名前か。そういえば名前は、無かったな。前世の名前を使うわけにもいかないしな。」

「私の名前の名前は無いから永琳、君が決めてくれ。」

「うーん。名前ね。」

30分後

「決めたわ。貴女の名前は、『深山 立花』よ。」

「『深山 立花』か。うん、気に入ったよ。」

「じゃあ、私の『街』に行きましょ?」

ん? 街? 永琳が子供の頃は無いと思っていたのだが。

「村じゃなくて、街なのか?」

「ええ。街よ。」

この森の周辺を見たとき何も無かったから森の周辺に街は無いと思っていたのだが。

まあ、何にせよ文化との接触はかなり久しぶりだからな。楽しみだ。

—少女達移動中—

「着いたわ。」

え? これ本当に古代の街? だって俺の生きていた時代とさほど変わらないぞ!

「さつさとついでこないと、置いてくわよ。」

「今、行くから。」

「八意様、おかえりなさいませ。それよりも隣の方はどなたですか?」

「隣の人は、妖怪に襲われていた私を助けてくれた人で、深山 立花よ。」

「ありがとうございます、立花様。」

「いえ。たまたま近くにいたから助けただけですよ。」

「それでも感謝しています。八意様に何かあつては大変ですの。」

「それよりも、立花をここに泊めてもいいかしら？」

「ええ。八意様の命の恩人ですの。」

よし。久しぶりに布団で寝られそうだ。

「立花、明日は街の案内をするわ。それと…貴女の能力を教えてくださいませんか？」

うーん。能力名は言えないな、ごまかして言える範囲で言うしかないな。

「私の能力は、『変化させる程度の能力』と『時を操る程度の能力』よ。」

「かなり強いわね。貴女の能力を聞いたのだから私も言わなくちゃね。私の能力は、『あ

らゆる薬を作る程度の能力』よ。」

やはり、原作と能力は同じか。まあ、当然だな。

なら、この後起こっていくイベントも原作と同じなんだろうが、俺というイレギュ

ラーがいるから今後どうなるかわからない。慎重に行動すべきなんだろうな。

「あらゆる薬を作れるなら、不老不死の薬も作れるのか？」

「作れるかどうか関係なしに不老不死の薬は作りたくないわね。」

「そうか。」

これからどうなるかわからないが、せっかくの二度目の人生（妖生？）なんだ。  
楽しんで行きたいな。まあ、明日に備えてしっかりと休むかな。  
おやすみなさい。

## 神との遭遇

「知らない天井だ。」

「一度言ってみたかった事が、言えたぜ。で、ここはどこだっけな。」

ああ、そういえば永琳の家で寝ていたんだっけな。ん、永琳が来たみたいだな。

「おはよう、立花。」

「おはよう、永琳。」

「昨日、言った通り街の案内をするから起きたらさつさと着替えてね。」

ああ、そういえば言っていたな。こんな街なんだから俺がいた時代と同等か、それ以上のものであるかもな。うん。少し、楽しみになってきたな。

「着替えたら、朝ご飯食べるから早くしてね。」

「うん。わかった。」

じゃあ、さつさと終わらせませるか。

「来たわね。じゃあ、食べましようか。」

「「いただきます」」



## 少女達、食事中

「はあ、美味しかった。」

「じゃあ、食べ終わつたし街の案内するからいくわよ。」

「わかつてるよ。でも、具体的にどんなところまわるの？」

「うーん。買い物ができるところを中心にまわるつもりだけど、貴女が私の家に泊まる事

と貴女がこの街で生活することを報告するためにあの方のところに行かなければならぬ

いのよね。」

「あの方？」

「ううん。こつちの話。詳しいことは後で教えるから。」

あの方なんて言う方には、かなり偉くて影響力のあるやつなんだろうな。

「じゃあ、行きましようか。」

「わかった。」

## 少女達、散策中

「案内も、大体できたから最後にある人に会ってもらおうわ。」

まあ、その人は人ではないのだけれど。」

ふーん。人ではないときたか。選択肢としては、妖怪、人を超えた者、半人半妖、もしくは神かな？

「永琳、もしかしてその人は「立花、着いたわよ。」…むう。」

「すまないけど、そこ通してくれるかしら？」

「はい。永琳様とそのお連れの方ですね。では、どうぞ。」

「いくわよ、立花。」

「はい。」

やっと、対面か。この気配と『気』から察するにあの方は、神なんだろうな。日本神話の神なら、少し知っているがどんな神なんだろうな。

「失礼します、八意です。本日は、例の件とは別件の要件があつて来ました。」

「入れ。」

「では、失礼します。」

ふーん。部屋の中は普通みたいだな。さくて、どんな神なのやら。

「永琳、今回ここに来た理由はなんだ？」

「今回は、私を助けてくださった方の紹介とこの地に住まわせる許可をいただけませんか」と

「思い、参りました。」

「ふむ。永琳、わたしはこの者と少し話したい。少し退出してもらえるか？」

「はい。わかりました。」

「立花、くれぐれも月読命様に失礼の無いようにね。」

うん。1対1で俺と話したいなんて何の用なんだろうか。まあ、予想はついてるけどね。それにしても、この街のトップが月読命だったとはね。

「さて、単刀直入に言わせてもらおう。貴様、妖怪だな？」

## 転生妖怪の行く末は？

もう気づかれたか。

「まあ、流石は神様といったところかな？」

「上手く妖力を変質させているようだがまだ甘いな。で、貴様はここで何をやる気だ？」

「特に何もする気はないよ。それはそうと、さつきから放っている神気を止めてくれないかな？」

かな？ 妖怪だからか、少スキついんだよね。」

「まあ、止めるぐらいならいいだろう。その言葉をからすると、貴様は妖怪では無かつた」

みたいな言い方だな。そういえば、転生した小僧がいたと聞いたな。」

もうバレてるのかよ。いくらなんでも鋭すぎだろ。それに、聞いた…か。

「バレてるんだったら、話が早いぜ。確かに俺は人間から転生した。なら、元人間だつた」

俺が人間を襲うと思うか？」

「確かに一理あるな。だが、転生したのは男だと聞いたのだが貴様は女ではないか。それ

では、転生したというのも信じられぬな。」

チツ。あの神のせいでもここに至りては面倒ごとが起きてるじゃねえか。

「俺は今は女だが前世は男だったんだよ。どれもこれも、あの神のせいだ！クソツ。」

「あの神？まて、……… ならやりかねない。」

貴様を転生させた神は最後になんと言っていた？」

「たしか、『君とはすぐに会うことになるかもね』だったかな？」

「ハア。確かに転生者みたいですわね。」

「なんで急に信じたことになったんだ？」

「その神は面白いからと言って、転生者に少し変化を加えて世界に落とすんだよ。前

にも

転生者に、会ったからな。」

なるほどな。次に会ったら絶対にあの神、ぶん殴ってやる。面白いからと言って俺を

こんな姿に変えやがって。許せないぜ。

「だから信じたことにしたんだよ。最初はすまなかつたね。妖怪をこの街に入れるわ

け

にはいかなかったからね。」

「妖怪はここに入れないか。それなら、俺はここには居られないってことか？」

「いや。転生者で、妖力がバレないように妖力を靈力に変質させることができるなら別に」

居てもいいさ。まあ、要するにこの街の住民に君が妖怪であることがバレなければいいのさ。」

「そうか。ならバレないように生活させてもらうさ。じゃあな、月読命。あの神とは違い

あんたはいいやつだよ。」

はあ、これで街で暮らせるか。もう面倒事は来ないでほしいぜ。

「立花、話は終わった？」

「ええ、終わったわ。」

「どうなの？ここに住めるの？」

「ええ、問題を起こさなければいいそうよ。」

「なら、私の家に住みなさい。色々と手伝って欲しいからね。」

「ならお願いするよ。これからよろしくね、永琳。」

「こちらこそよろしくね、立花。」

この日から彼女は、この街で暮らすことになった。

しかし、この時の彼女はあんな事が起こるとは知らなかった。

知ることもできたはずなのに……。

いや、彼女も知ろうなどとは考えていなかったのだろう。

## 閑話：月読命の受難

私は月読命だ。

この都市の守り神であり頂点だ。

少し前に転生者がきたが、また来たようだな。

しかも、妖怪か……。

うくん。どうするべきか。

妖怪に転生なんて、絶対姉さんの仕業だ。

まあ、人となりを見てどうするかは考えるか……。

姉さんが、転生させたからできるだけ消したくは無いんだけどね。

まあ、会ってから考えてみよう。

く妖怪、来訪中く

「失礼します、八意です。本日は件の件とは別件の要件があつて来ました。」  
さて。どんな妖怪かな？



上手く妖気を靈力に変質させているようだね。面白い。  
早速、ご対面だ。

「入れ。」

「では、失礼します。」

「害意は無い……か。」

「永琳、今回ここに来た理由はなんだ？」

「今回は、私を助けてくださった方の紹介とこの地に住まわせる許可をいただけませんか」と

「思い、参りました。」

「ふむ。永琳を守ってくれたか。」

「それに妖怪に対して単騎で勝てる実力か……。」

「1度話してみるかな？」

「ふむ。永琳、わたしはこの者と少し話したい。少し退出してもらえるか？」

「はい。わかりました。」

「立花、くれぐれも月読命様に失礼の無いようにね。」

「よし。これで話すことができる。」

「さて、単刀直入に言わせてもらおう。貴様、妖怪だな？」

「まあ、流石は神様といったところかな？」

当然だ。神ならば能力を使われていてもわかるわ。

「上手く妖力を変質させているようだがまだ甘いな。で、貴様はここで何をやる気だ？」

「特に何もする気はないよ。それはそうと、さつきから放っている神気を止めてくれない

かな？妖怪だからか、少しきついんだよね。」

おや。神気が漏れていたか、止めねば。

よし、止まった。

「まあ、止めるぐらいならいいだろう。その言葉をからすると、貴様は妖怪では無かつた

みたいない方だな。そういえば、転生した小僧がいたと聞いたな。」

「バレてるんだつたら、話が早いぜ。確かに俺は人間から転生した。なら、元人間だった

俺が人間を襲うと思うか？」

「確かに一理あるな。だが、転生したのは男だと聞いたのだが貴様は女ではないか。それ

では、転生したというのも信じられぬな。」

「俺は今が女だが前世は男だったんだよ。どれもこれも、あの神のせいだ！クソツ。」  
あーあ。姉さん恨まれてるよ。

「あの神？さて、（姉さん）ならやりかねない。

貴様を転生させた神は最後になんと言っていた？」

今回は、性転換なんてさせて……。

「たしか、『君とはすぐに会うことになるかもね』だったかな？」

やっぱり、姉さんはいつもと変わらず……か。

「ハア。確かに転生者みたいですネ。」

「なんで急に信じることにしたんだ？」

「その神は面白いからと言って、転生者に少し変化を加えて世界に落とすんだよ。前にも

転生者に、会ったからな。」

前に来た彼は、男の娘になっていたし……。

「だから信じることにしたんだよ。最初はすまなかったね。妖怪をこの街に入れるわけにはいかなかったからね。」

妖怪云々の前に、害意がないか確かめたかったからね。

「妖怪はここに入れないか。それなら、俺はここには居られないってことか？」

「いや。転生者で、妖力がバレないように妖力を靈力に変質させることができるなら別に

居てもいいさ。まあ、要するにこの街の住民に君が妖怪であることがバレなければいいのさ。」

「そうか。ならバレないように生活させてもらうさ。じゃあな、月読命。あの神とは違い

あんたはいいやつだよ。」

うん。姉さん、次にこの子にあった時は絶対に殴られるだろうな。

とりあえず、問題は1つ解決……か。

あー。まだ問題があるー。

本当に多すぎるよ。

まず、姉さんのイタズラが無くなれば問題は楽になるのに。

本当に大変だよ。ハア。

次にやる仕事は、第一に優先すべきロケット開発の会議かな？

その後は、書類の確認ですか。

本当にやるべきことが多すぎますよ。

では会議に行きますか。

【月読命。彼女は本当にかわいそうで、受難が多すぎる…。】